

国際交流基金アジアセンター
アジアフェローシッププログラム
堀崎剛志

「ソーシャルドレス ネットワーク」(アートワークショップを通じた地域コミュニティの横の連携に向けたネットワーキング)



フィリピン ケソン市 @フィリピン大学ディルマン校
美術学部 1/30/2019

そこにあるものからストーリーを広げることにし、
横浜との会話では、フィリピンの神話に発展した。

最上段の写真はTito de la Peña氏撮影



カンボジア プノンペン

@Toul Prasat Sen Sok
High School 2/1/2019

プノンペンから車で45分
くらいの郊外の高校。
職員含めネットが繋がら
ない環境だったが、辛くも
スマホは通じ、フィリピンと
チャットはなんとか成功。

右 フィリピンでの完成形を並べて
フィリピンの学生とチャット



左 手足の型取り後に話し合いながら完成した
新しいカタチ



ベトナム ハノイでのワークショップ @Six Space

2/24/2019

Trump x Kim 会談を翌日に控え、向かい側が関連施設となって警戒が始まったハノイでの実施。案の定、検閲まがいの横槍が入るも、参加者は真っ向から口論し、紆余曲折、大事に至らず木の型取りは完成。施設内で討論とコラージュ、カンボジアとビデオチャットしながら制作について話し合った。

ハノイ版は、検閲にあっただけに、高校生の皆が描いたのは、抗議運動中の学生が、絞殺されているところだ
そう!! ちょっと学生らしくも、驚く。

これまで各地で制作されたものが、様々なものになっていくのが、どう作られたか知っている筆者には興味深い。





インドネシア ジャカルタでのワークショップ @ルアンルパ 3/8/2019

ハノイとは一転、気温 湿度 街の表情も違う
ジャカルタ。やや郊外よりに、土地も購入して新
展開した、Gudskulという名称のRuangrupa。
平均年齢21歳の皆さんと、今回は横浜からの一
連の変化をスライドトークして、自由創作しても
らう形式になし崩しに成立し、予定時刻から1
時間遅れ、合計4時間、夜の9時過ぎまで行わ
れた。コラージュは、hut, 家を考えて作ったそう。
布団をかけて寝ている人形が真ん中にある。





インドネシア ジョグジャカルタ @Lifepatch 3/20/2019

ジョグジャカルタはインドネシアで最も長くしっかりと王国が続いた都市であり、インドネシア独立に向けてイニシアティブをとった1つであったり、様々な分野でのインフラは進んだ町のように。インドネシアの芸術、アートはバンドン、ジャカルタとここで集約される現状の中で、ここにはかなり広い範囲での美術のインフラが整っています。その中でLife Patchに滞在しながらリサーチした理由は、現代アートではないアプローチのコレクティブの視点で探りたかったとと言っても差し支えないかもしれません。

実際、ワークショップを実施するにあたり、まずはライフパッチが何をしているか(事前にリサーチはしましたが現実のやり方は見ないとわかりませんから)いろんなことにご一緒させていただいて、かなり自然科学、環境問題に対するコミットが強いことがわかりました。フェリアルさんが中心に企画することになり、話し合った結果、トークとワークショップを別々で実施。興味深い視点だったのは、「場所は無料で貸します、参加者を集めたりもこちらでするので、夕飯やおやつ代として1万円ずつ出してください」とのことで、参加者が制作しても持ち帰れないのは搾取されていることと同じで、であれば最低、ご飯を出してあげて欲しいというニュアンスでした。お金をかけるより、カレーを作る方がいいと思い、カレーを作りました。フェリアルさんの思想は多くの対話から、非常に厳格であることに気づきましたが、同時にこれはコレクティブでのイベントの場合のホストのしかたにも理由があります。私はそういうきちとした討論をすべきだと思い、参加者ともこの話をしてお互いに話し合いました。ここには明確な解答はないので、話をすることが大事だと思いました。結構フットワークのいい意見が興味を引きました。

アジアへの自覚（個人編）

筆者は90年代の高校時代に同級生が東京都のプログラムでタイに1学期間の留学し、その体験を聞いた頃より東南アジアへの興味が始まり、大学時代には筆者は美術史が専攻ではあったが、所属大学の建築学科においてアンコールワットの修復研究がなされていたこともあり、訪問の機会を伺いつつ断念、卒論の織部焼の技術・材料研究から、東南アジアの影響を知り、個人的に訪問する機会を狙いつつも果せることなく、2000年以降、米国での生活が継続してからは残念ながら物理的な訪問を果たせずに至りました。

しかしながら、2005年、ニューヨークに移住後は、数々のアジアからの（クメール朝や東アジアの）彫刻を中心とした美術に触れ、少ないながらも様々なアジア情報や、さらには東南アジアからの人々や在米のアジア人との交流が生まれました。米国を介してアジアに繋がりはじめたと言えます。そのおかげもあって、太平洋を飛び越える難しさの中、2009年の韓国、仁川での国際展、2012年のソウル市での美術滞在制作、2016年のカンボジア訪問をきっかけに、直接的な関わりが始まりました。

「コミュニティ」という単位の将来性

その上で、美術史的な美術の枠に留まらず、米国での10年以上のコミュニティベースのアート制作活動から得た知見やネットワークから、米国という一国・国家の中だけではなくコミュニティという単位の視点で、国の枠を超えたコミュニティ同士の弾力的な連携・交流は、社会問題の解決に向け、下からの力となり得るのではないかと考えるようになりました。（NGOやロータリークラブというような組織によるトップダウンなネットワーキングではなく、コミュニティがインターネットのような網構造で繋がりながらアーツを介して広がるイメージでした。）

2017年の夏、日本への一時帰国が決まると、東南アジアへのアクセスが格段に縮まるため、上記の思いを実行に移すべく、具体的にこれまでのコミュニティと東南アジアのそれとはどのように結びつくことが可能なのか、まずは模索してみることにしました。

第一子をもうけ、イクメンで奔走する2018年の初夏、限られた時間の中で最初にできうることを、最終的にアジアセンターフェローシップへの申請と

してまとめられました。以下は、帰国後に実際に体験したことを元に書き直したフェローシップの内容です。

プロジェクトの概要と抱負

「ASEANのうち（フィリピン、カンボジア、ベトナム、インドネシアの）4カ国を訪問し、現代アートに限らず、音楽・パフォーミングアーツ・演劇・建築・伝統工芸など様々な芸術（アーツ）を通じてコミュニティ形成やその維持に取り組む人々のうち、規模や目的が異なる様々なグループ・団体を訪問し、（現代美術家である筆者が15年続けている）液状ゴム・ラテックスによるワークショップとビデオチャットを介して各地をリレーしながら継続的なプロジェクトを実施しました。59日間のリサーチでは、これを基軸に各地の社会・経済そして政治的現状を体感しながら、4カ国9都市の様々なコミュニティと互いの知見・情報を交換し、そこで知った情報、知り合った人々を紡ぎながら新たな（コミュニティ）ネットワークの構築に尽力いたしました。これらのネットワークは今後、日本国内に限らず世界各国にあるコミュニティを“芸術をツナギ”に横に連携することで、国家単位でない協働への橋渡しになる基盤になると信じます。」

NPO 法人ではない、個人の活動

その中で、当初から「作家の視点によるネットワーク」の重要性を強調しましたが、これは学術研究者やキュレーター、企業に属する人々などの活発な往来に対し、なかなかネットワーキングが難しい(地域に根付かざるを得ない)作家たちの側からネットワーキングすることの重要性を問いたいということが端緒としてあり、同時に、アーティストやアートに対するところのキュレーターの往来が「客観性」を担保しているとするのであれば、あえて「私」という個人の作家の視点で交流することで、作家が持ちうる「主体性」（やリーダーシップに近いファシリテーターシップ）が持つメリットを生かしたネットワーキングの可能性を探りたかった点にあります。

これは美術分野に関して言うと、キュレーターによる客観性が様々な（立場、政治、財源など）他の要因によって担保しづらくなっている昨今の事情があり、そうであるならば、積極的に作家同士がネットワークしていくことも重要なのではないかという危機感が背景にあります。

また、米国での活動や調査で、コミュニティの健康的な持続には芸術的なアプローチで繋がることと、リーダーシップを取る人材には作家（の範疇に入る）人々が多かったこと、自身のコミュニティアートの経験から上記のようなネットワークキングの手法にこだわりました。（その意味では今回のコレクティブであるルアンルパに滞在した経験は興味深いものでありました。）

国境を越えやすいコミュニティの潜在能力

また、少々繰り返しになりますが、（地域）コミュニティの側面から見ると、彼らが直面している（あまり世界的に脚光を浴びないような）様々な問題は、地域・国境・人種を越えて多く（構造）の類似性があり、一国内での議論や連携だけでは解決しづらいけれども、国を越えたネットワークキングがなされれば、もっと開かれたチャレンジが可能になるのではないかと、これまでのコミュニティベースでの作家活動から痛感したことが非常に大きいです。

個人的ネットワークキングの危険性

ここではNPO法人のように公共性の（響きが）ある団体によるネットワークキングではない、個人によるストレートで速攻性のある活動に注目しました。これは目に見える問題解決へ向けたアクションではなく、お互いが気づきを与える（ナマの情報交換を行う）ことで、双方が次の一手へのあたらしい発想が生まれる土壌づくりへ寄与できると思ったからです。言うが易しですが、フットワークの良いネットワークが構築されれば、コミュニティ同士(やそこに属する個人と)の交流が容易になり、NPO法人のような企業と似た組織形態の団体が軽快に動きづらい部分へのサポートや協働にも繋がると感じました。

そこで、今回のフェロー中に心がけていたネットワークキングは、（単純に一個人作家の作品を制作し展示するという機会拡大のために）美術関係者を紹介していただくということは主眼でなく、面会した方の友人であったり、企業の駐在員だったり、街角で偶然出会った現地の人々だったり、アートに関わらず広範に交流したことでした。もちろんこれらは私「個人の視点」から始まる主観的なもので、公共性に疑問が残りますが、几帳面にスケジュールをこなしていかない、一本のレールに沿わないネットワークキングは、将来への偶発的な空間を残す勘どころとなるのかもしれない。

現代美術家が行うソーシャルなネットワーキング

そして、そもそも現代美術家として、プロの作家として美術（作品）の奥深さを痛感している筆者が、芸術（アーツ）を「メディウム」としてコミュニティ活動に従事するグループと関わったり、繋がることは、一見、芸術を軽んじているかのような、意に反しているかのように美術業界からはみえるかもしれませんが、私自身の作家活動や作品は、このような今まさに変化し続ける生きた世界から体感され五感から吸収する色々によって生まれるので、それは一対一対応ではないけれども、最終的には哲学的なものであったり、歴史資料に寄与される作品もあろうかと思えます。

6都市から9都市探訪の実験的側面

以上の理由により、現地での会話や出会いによって、出発時に設定した訪問地である6都市から別の都市にも波及し、最終的に同4カ国内の9都市を巡り、そのうちの4箇所ワークショップを実施しました。実は周到に事前準備し、各地でワークショップを実施するのも良い方法だと考えてはおりました。また、出国前ミーティングではアジアセンター長の鈴木勉氏が質問されたように、「このようなことが実現可能なのか」という疑問も挙がりました。しかしながら受入団体の多くが、「実際に現地で会ってから決めましょう」というスタンスがほとんどだったこともあり、私の心のうちではワークショップは補助的なレベルに留め、むしろワークショップ実現を話し合う中でどのように進めていき、何がどうなるのかということをや取りするうちに、コミュニティの性格や状況が赤裸々に理解でき、将来のより踏み込んだコミュニケーションとネットワークを容易にするのではないかという考えのもとに臨んでおりました。